【第１回】
プロフェッショナルたちが語る、カマンが実施する食育についての言葉

食育プリスクール Common での時間が育むもの
～幼児教育の視点から～

関西学院大学　副学長・国際連携機構長　教育学部 教授 /
博士（人間科学）

日浦　直美 / Hiura Naomi

8月の朝のおだやかな光あふれる清潔で過ごしやすい空間の中で、幼い子どもたちが信頼する複数の大人に見守られ、幸せそうに過ごす姿は、まさに平和そのものの光景でした。ここには、今、わが国で認可された幼稚園や保育所でさえ、さらに、家庭でさえ充分に経験できない多くのものが子どもたちを取り囲んでいます。その人的・物理的環境との相互作用を通して、子どもたちは気づかぬうちに、人間として生活していくために必要な知識・態度・技能を自らの中に培っています。Commonでの時間が育むもの、それが何であるかを幼児教育の視点から改めて考えてみました。

私達は、今、核家族化、少子化、都市化が進む現代社会の中で、懸命に子どもを育てていますが、この現状が、本来、子どもが子どもらしく健やかに育つ上での大切な機会を奪っているかもしれないと心配している方も少なからずいらっしゃることでしょう。それでは、子どもが育つ上での大切な機会とはいったい何でしょうか。

1つは、子どもが保護者以外の地域の他の大人と接する機会です。核家族化と少子化によって、現代の子育ては「植木鉢化」していると言われています。これは、保護者が子どもを大切に思うあまり、地域社会から子どもを切り離し、家庭に囲い込んでいる姿を現す言葉ですが、子ども達は、植木鉢に植えられた花のように、保護者の管理下におかれ、保護者（特に母親）と密着してしまいます。このような状態で、「愛情」という名の水を植木鉢に注ぎすぎると、花は根腐れしていくという図は容易にイメージできるのではないでしょうか。

子育ての究極の目的は、子どもが、周りの人々と助け合いながら、自立して生きていけるようにすることだと思われます。そのためには、家庭に囲い込まれ、親とのみ始終向き合っているような生活ではなく、保護者以外の地域の大人も含めたたくさんの人々の中で、自分が守られ、自分も他者のために活かされているということを子どもながらに感じる経験をすることが大切です。時には、親が知らない所で叱られて反省したり、子どもらしい「秘密」をもってドキドキしたり、誰かに「ありがとう」と感謝されたりするような体験こそが、生きるための知識や態度や技能を身に付けていくことつながっていくものと思われます。また、子どもが成長していく過程で、保護者以外に、憧れを抱いたり、尊敬したり、頭が上がらないなあと思う人（メンター）がいることが大切だとされています。

Commonには、数名の幼児教育のプロ（幼稚園教諭免許取得者））や栄養士と共に、オーナーの久保田夫妻が子どもたちに熱心にかかわっておられます。このかかわりの中に、人がお互いに気持ちよく過ごすことができるための「人間としての心遣い」を子どもに自然に伝える姿が見受けられました。これは幼児教育のプロ、いわゆる「先生」が、専門的に頭の中で整理した上での言動ではなく、大人が人生の先輩として、当然子どもに伝えるだろうというような、当たり前のかかわりなのですが、現代の親子関係や、さらには、幼稚園や保育所の先生と子どもの間にもあまり見られなくなったかかわり方ではないかと、ハッとさせられるものがありました。このような人間の「大人」としての温かでかつ毅然とした言動は、幼い子ども達の心にまっすぐに届いているものと思われます。ここにはかつての拡大家族にあった父性と母性が、また、大人間の一種のヒエラルキーが存在しています。そして、子ども達はCommonにいる大人たちの役割を子どもたちなりに察知しつつ、「大人」とはどのようなものかを学びながら、心のひだを豊かにしていることがわかりました。また、夏休みに卒業した子ども達が遊びに来て、まるでここが自分の居場所だといわんばかりに自由にふるまっている様子を見ていると、この子ども達は、成長した後も、きっとここで出会った人々のつながりを心にとめ、人生の折々に久保田夫妻や先生達を訪ねてくるに違いないと思えました。

子ども達が育つ上で大切な機会として第二に挙げられることは、子どもが自分の存在が他者のためになっていると感じることです。わが国の1人の女性が一生の間に産む子どもの数の平均（特殊合計出生率）は2人以下になり、家庭では少数の子どもに集中して「愛情」を注ぐようになりました。敏感に両親や祖父母の「期待」を感じとって、その期待に応えようと、周りの大人の顔色を窺いながら、いわ

ゆる「よい子」を演じる子どもが増えており、大きな教育課題となっています。大人達の期待に無意識に応えようとする子どもは、大人の言うことに従ってさえいれば愛されるのだと思い込んでしまいます。そして、大人から示される「〜したら○○してあげる」という条件付きの「愛情」の中に浸って、主体性を失っていきます。子ども達は、「〜しなさい」「〜したいの?」「〜してあげようか?」といった大人の言葉にただうなずくだけの受け身の存在になってしまうのです。

人間の生きがいは、誰かのために自分が役立っていると思えることだと言われています。したがって、子どもは幼い時から、子どもなりに誰かのために役に立っていると実感する機会を、より多く持つことが非常に大切だと思われます。ところが、多くの家庭では、子どもは誰かに何かをしてもらうだけの存在になりつつあります。あるいは、子どもの主体性を尊重するあまり、子どもがやりたいように、思うようにさせるのが愛情だと勘違いしている保護者も多く見受けられるようになりました。「子どものため」という思いから誤った子ども中心主義に陥り、子どもをまるで「お客様」のように、また、いまにも崩れて形をなさなくなる「ガラス細工」のように扱ってしまう傾向にあります。このような状況の中で、家庭でも幼稚園や保育所等、家庭外の集団生活の場でも、一人ひとりの子どもが、自分の属している共同体の一員として、その共同体を維持するために、自分が何らかの役に立っているという実感が持てるような体験をすることが求められています。

Commonでは、調理を通して、子ども達が様々なことを学んでいますが、自分が誰かのために役立ったという実感は、自分達がいただく食事を分担して準備し、最後に「おいしかったねえ!」と共感し合う体験を通して、おのずと子ども達の心に積み重ねられていくことでしょう。教育の上で「個」というものがあまりにも尊重されすぎた反省として、現在の幼児教育・保育内容では「協働的学び」ということが強調されています。 Commonでは、まさにこの「協働的学び」が体験できていると思います。食材を育てた人、ちくわを切った人、鶏肉を炒めた人、卵を割りいれて混ぜた人など、それぞれの役割分担があってこそ、このような美味しい食事がいただけるのだということを子ども達が実感できた時、さらに、食後にお皿を洗ってくださる人にまで子どもが思いを至らせることができた時、子ども達の調理体験は、ここにいるみんなにとって自分は大切な作業の一端を担っているという自己効力感へとつながっていくものと思われます。また、このことを通して、自分が他者と共に活かされている喜びを、子どもなりに心にとめることができるのではないでしょうか。

第三は、幼児期に適した「学習」の機会です。子どもは、そして子どもならずとも、人は自分の周りの人やモノとの相互作用を通して主体的に知識を構築していく存在であると言われています。ところが、受け身に、ただ、与えられる知識を頭に入れ込むことが本来の学習ではないということはわかっていても、子どもの未来を想うあまり、そのことを忘れ、つい、子どもの「やりたい気持ち」(主体性)を無視したお仕着せの学習を強いてしまう保護者の方も多く見受けられます。幼児期は「遊びを通して学ぶ」と言われるゆえんは、遊びは外から強制されるものではなく、主体的に行うものという論理が働いているからですが、Commonでは、おいしいお食事づくりという調理体験を通して、子どもの「やりたい気持ち」(学習における主体性)が自然にわき起こるような環境が用意されています。

まず、食材の名前や形、数量について、大人の言葉かけにより、子ども達は自然に興味をもつことができるように工夫されています。次に、生活年齢に合わせてそれぞれの子どもが「今できること」より少し先の課題(これは発達心理学的には発達の「最近接領域」と呼びます)を準備し、子どもがその課題に挑戦し、達成感を味わうことができるように助けます。また、五感を駆使すること、特に普段の都会生活ではあまり気に留めることのない、食材や調味料の香りをかぐ体験や、細かい作業で手の巧緻性を養うこと、さらに、みんなが揃うまで待つことを通して自己統制力を培うことなどを総合的に身に付けることができます。「いただきます」という声と共に始まる食事は、子ども達がみんなと「一緒に食べる」ことを通して、食事のマナーを守りながら「きれいに」食べることを自然に身に付けることができるように導いています。最近では、レストランで親は携帯電話、子どもはゲーム機に目をやってろくな会話もしない親子づれをよく見かけますが、Commonの子ども達は、静かに、食べることに集中していました。きっと味わって食べていることでしょう。このことは幼児期の「食育」の中で非常に大切なことだと思われます。「ああ、おいしかった!」という誰かの声が部屋に響いて、そこにいる人々がみんな、食事をする幸せを共感します。一緒に食べる喜びを、特に取り立てて言うこともなく、ごく自然に誰もが味わって満たされた気持ちになる、そんな時間の中で、私も幸せな気持ちになりました。子ども達が調理と食事を通して体験していることは、就学後の学習の、さらには、これから先の他者と共に生きていく生活の上での基礎となるものだと思われます。

以上に述べたように、Commonで過ごす時間には、子どもが育つ上で大切だと思われる機会に溢れています。しかし、オーナーの久保田夫妻は、Commonが家庭の代用ではないこと強調しておられ、保護者のみなさまとのパートナーシップのもとに、子どもたちを守り、育てていきたいと考えておられることがお話をうかがってよくわかりました。ご夫妻のこのご信条こそが、Commonを食育プリスクールとして存在させている根幹だと思いました。保護者のみなさまが、子ども達のCommonでの体験をご家庭で共有され、それを一層深めて、子ども達と共により豊かな時間を過ごされますよう、心からお祈りしています。

COMMON